

樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントとの史的関係（1）：両アイヌ方言の音韻における史的関係の解明に向けての研究序説

板橋，義三
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5392>

出版情報：言語文化論究. 14, pp.87-103, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語の ピッチアクセントとの史的関係 (1)

— 両アイヌ方言の音韻における史的関係の解明に向けての研究序説 —

板 橋 義 三

0. 序論

従来、樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントの関係に関して述べた論文はほとんどなく、服部(1967)、服部&知里(1960)、Vovin(1993)の3編のみである。前者2編ではアイヌ祖語は樺太アイヌ語と同様に母音の長短のみが弁別的であったとしたのに対し、後者ではアイヌ祖語は現代日本語と同じように母音の長短とピッチアクセントが独立して弁別的に存在したとしているが、どちらも参考資料や方法論に関して不十分であり、その結論には十分が根拠がないものとなっている。従って、本稿では服部(1967)とVovin(1993)を中心に見ることでその両アイヌ語の対応関係を分析するが、現存の樺太アイヌ語における母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントに関する文献を中心にピッチアクセントと母音の長短の有無について試論を展開する。因みに次拙論(2)ではアイヌ祖語形をこれまでの文献から復元する作業を中心とする。論文の構成は以下のとおりである。

0. 序論

1. アイヌ語の音声・音韻

- a. 北海道方言の音韻体系
- b. 樺太方言の音韻体系
- c. 千島方言の音韻体系

2. アイヌ語の母音の長短とピッチアクセントに関する先行研究とその問題点

- a. 服部四郎 (1967) 服部&知里 (1960)
- b. A. Vovin (1993)

3. 北海道アイヌ語と樺太アイヌ語の音韻体系の相違

- a. 母音と子音の対応
- b. 音節とアクセントの対応

4. 本論

5. 結論

1. アイヌ語の音声・音韻

アイヌ語の音声・音韻は母音の種類と数に関してはどの方言でもおなじであるが、母音

の長短を確実に持つといえる方言は樺太方言のみである。子音の種類と数は語中の出現位置を除いては同じである。半母音に関しては種類と数はどの方言も全く同じである。以下にそれぞれの方言について理解しやすいように箇条書きで概略を示す。またここに示した語例はほとんど服部(1964)のアイヌ語方言辞典によるが、それはこの辞典が唯一北海道アイヌ語の多くの方言と樺太アイヌ語（ライチシカ方言のみ）にアクセントを表記しているからである。

a. 北海道方言の音韻体系

1) 母音: /i, e, a, o, u/

- | | | |
|---|---|---|
| i | u | a) /u/ は日本語の非円唇ではなく円唇で /o/ に近い。 |
| e | o | b) すべて短母音。ただし、開音節で単音節の語は一般にその母音は長めに発音されるが弁別的ではない。 |
| a | | pa[pa:] 「年」 ka[ka:] 「糸」 ki[ki:] 「する」 |
| | | ri[ri:] 「高い」 ru[ru:] 「道」 |

2) 子音: /p, t, k, c, s, m, n, h, r, ʔ/

- | | |
|------------|--|
| 破裂音: p t k | a) 破裂音と破擦音は有声／無声、有気／無気の音韻的対立がない。e. g. ʔacapo[ʔacapo-ʔajabo] 「おじさん」 |
| 破擦音: c | |
| 摩擦音: s h | b) 語頭では無声、母音間では有声化しがち、特に鼻音の直後では有声化する。e. g. sanpe [sampe-sambe] 「心臓」, |
| 流音: r | konci [konci-konji] 「頭巾」 |
| 鼻音: m n | c) 語末の閉鎖音 p,t,k は内破音であり、一般に聞き取り難い。kap[kaʔ] 「皮」 pet[peʔ] 「沢」 tek[teʔ] 「手」 |
| 声門音: ʔ | d) 摩擦音は無声のみで有声化しない。 |

3) 半母音 /y, w/

- a) 音節末では重母音の第二母音となる。
toy 「土」 pewre 「若い」 cf. ya 「網」 wen 「悪い」

4) 音節構造

- a) 日本語と同様非常に単純である。語頭には子音の連続はなく、拗音のような子音と半母音の連続もない。(即ち C_1C_2- , $C_1yV(-)/C_1wV(-)$ は存在しない。)
- b) 同じ母音の連続もない (つまり、母音の長短の区別がない)。
- c) 日本語と異なり、閉音節も開音節と同様一般的である。
- d) 音節末に現れ得る子音と半母音は以下のとおりである: /p,t,k,s,r,m,n,w,y,ʔ/
- e) 音節末に現れない子音は以下のとおりである: /c, h, ʔ/
- f) 母音で始まる音節は母音の前に声門閉鎖音 /ʔ/ があると見なせるので、
 C_1V または C_1VC_2 の音節となる。

5) アクセント

- a) 高低アクセントが音韻上の区別を行う。
- b) 日本語と逆で、低から高への上昇が弁別的である。この上昇点より前の音節はすべて低く、その後ろの音節は次第に下降する。
- c) 美幌、様似、釧路(春採)方言では音韻上の高低アクセントの対立がない。(即ち、音声学上の一型アクセントである。)

d) アクセント核の位置は、北海道方言でも差があるが、多くの方言で次のような傾向がある。

1. 第一音節が開音節であるならば、アクセント核は第二音節にある。
 sapa LH 「頭」； sapaha LHL 「彼の頭」； kusapaha LHLL 「私の頭」
 第一音節が開音節でもアクセント核が第一音節にある語がある。
 tere HL 「待つ」； pase HL 「重い」； teta HL 「ここに」
2. 第一音節が閉音節であるならば、アクセント核は第一音節にある。
 sikup HL 「育つ」； penram HL 「胸」； notkir HL 「あご」

b. 樺太方言の音韻体系

1) 母音： /i, e, a, o, u/

- | | | |
|---|---|---|
| i | u | a) /u/ は日本語の非円唇ではなく円唇で /o/ に近い。 |
| e | o | b) 長短母音の音韻的対立がある。 |
| a | | nina 「大おひょう」 nisah 「すね」 ?ikasma 「残る」
niina 「薪をとる」 niisahno 「急に」 ?ikaakuspe 「上着」
heekopo 「妹」 ?ekaari 「出会う、見つける」
niipoopo 「ニポポ (人形)」 weekaari 「会う、集まる」 |

c) 開音節で単音節の母音は長い。

cii 「熟す」 nii 「木」 ?ee 「食べる」 ree 「名前」 ?aa 「座る」 maa 「泳ぐ」
 too 「沼/湖」 poo 「子」 kuu 「飲む」 nuu 「聞く」 ruu 「道」

d) 開音節でアクセントのある母音は長い。

niirus 「歯茎」 heese 「息をする」 yeenu 「膿が出る」 haaciri 「転ぶ」
 ?aane 「細い」 pookoro 「生む」 tookes 「午後」 tuunas 「早い」 huure 「赤い」

2) 子音： /p, t, k, c, s, m, n, h, r, ?/

- | | |
|------------|-----------------------------|
| 破裂音： p t k | a) 破裂音と破擦音は有声／無声，有気／無気の音韻的対 |
| 破擦音： c | 立がないが，一般に無声無気である。 |
| 摩擦音： s h | b) 語頭では無声，母音間や鼻音の直後では有声化する |
| 流音： r | ことがある。 |
| 鼻音： m n | c) 摩擦音は無声のみで有声化しない。 |
| 声門音： ? | |

3) 半母音 /y, w/

a) 音節末では重母音の第二母音となる。

toy 「土」 haw 「声」 cf. yaa 「網」 wen 「悪い」

4) 音節構造

- a) 日本語と同様非常に単純である。語頭には子音の連続はなく、拗音のような子音と半母音の連続もない。(即ち C_1C_2 -, $C_1yV(-)/C_1wV(-)$ は存在しない。)
- b) 同じ母音の連続がある (つまり、重/長母音がある)。
- c) 日本語と異なり、閉音節も開音節と同様一般的である。
- d) 音節末に現れ得る子音と半母音は以下のとおりである： /s, m, n, w, y, h/
- f) 音節末に現れない子音は以下のとおりである： /p, t, k, c, r, ?/

しかし、タライカ方言は北海道方言と同じ閉鎖音、摩擦音が音節末に現れる。

- g) 母音で始まる音節は母音の前に声門閉鎖音 /ʔ/ があると見なすので、C₁V または C₁VV または C₁VC₂の音節となる。

5) アクセント

- a) 音韻上の弁別的な高低アクセントはなく、一般に母音の長短で音韻的対立を表す。
 b) 日本語に類似したモーラ型言語である。1 モーラ：CV, V, C* の三種がある。
 c) アクセントのつく最も短い自立形式は2モーラ以上であり、この3種の型かまたはその組み合わせである(村崎：1979)。

CV|CV : 2モーラ (2音節) LH C : すべての子音

CV|V : 2モーラ (1音節) H この場合 VV は重母音

CV|C* : 2モーラ (1音節) H C*:/s, m, n, w, y, h/

1. 主アクセントは第2モーラにあるが、それ以上のモーラがある語では副アクセントは第4, 6, 8の偶数のモーラにありそのピッチはその順に低くなる。但し、そのアクセントのあるべきモーラがVまたはC*であれば、その前のモーラにアクセントが移る。また文末だったり強調されたりしてアクセントの位置が変化したものがあるが、それをアクセントの二つ目に挙げる(村崎1979:5-6)。ここでは音声上のピッチアクセントは北海道アイヌ語との比較を念頭において音節による区分に従った。

CV CV	sapa	LH	「頭」	CV CVC	cikah	LH	「鳥」
CV CV CV	hekaci	LHL/LLH	「子供」	CV CV CVC	ʔarawan	LHL	「7つの」
CV CV CV CV	sapanuma	LHLH/LLLH	「頭の毛」	CV CVC CV	nisahta	LHL	「朝」
CVV	kaa	H	「糸」	CV CVV CV	ʔuneeno	LHL	「同じ」
CV CVV	ʔikuu	LH	「タバコを飲む」	CVV CVC	niikah	HL	「樹皮」
CV CV CVV	hacikoo	LHL/LLH	「少ない」	CVV CV CV	heekopo	HLH	「妹」
CVV CVV	yaanii	HL	「流木」	CVC CV CVC	kahkemah	HLH	「奥さん」
CVC	pon	H	「小さい」	CVC CVV	ʔenkaa	HL	「上」

c. 千島方言の音韻体系

この方言の話者は戦後には既に存在しなくなっていたので、現存の資料や参考文献を基にせざるを得ない。それに基づいて出来る限り厳密に音韻構造を記していくが、具体的には鳥居[KT](1903), Dybovski[KD](1912), Krashennnikov[KK](1738), Voznesenskii[KV](1843以前)に基づく。

1) 母音：/i, e, a, o, u/

- i u a) /u/ は日本語の非円唇ではなく円唇で/o/に近い。
 e o b) 主に開音節の語だが、長母音で示してあるものが多くある。
 a その母音は長めに発音されたと見られるが、その長短が同じ資料または他の資料で必ずしも一致しない。従って、その長母音の存在の信憑性にも欠ける。

doobechi/tubechi 「2」(KT) cf. tubich (KD), tuup (KK), tunnie (KV)

mokooro「寝る」(KT)	cf. kmokonrosiva (KK)
nij「木」(KV)	cf. ni (KD), ni (KK), ni (KT)
pee/pe/peh「水」(KT)	cf. pie (KD), pi (KK), pie (KV)
reebichi/rebichi「3」(KT)	cf. ribich (KD), riep (KK)
too「昼」(KT)	cf. asinto「誕生日」(KD), to「昼」(KK), to「昼」(KV)

2) 子音: /p, t, k, c, s, m, n, h, r, ʔ/

- 破裂音: p t k a) 破裂音と破擦音は有声／無声, 有気／無気の音韻的対
破擦音: c 立がないと見られる。e.g. ʔacapo[ʔacapo-ʔajabo]「おじさん」
摩擦音: s h b) 語頭では無声, 母音間では有声化する傾向にある。
流音: r e.g. surgur(KK), siurgur(KD), shurukuru(KT)「鷺」
鼻音: m n ʔapi(KK), ʔabi(KD), ʔabe(KT)「火」
声門音: ʔ c) 摩擦音は無声のみで有声化しなかったと見られる。

3) 半母音 /y, w/

- a) 語頭に /y-/ は現れるものがほとんどなく, 現れた場合でも他の母音で表されたものが同時に記してあることがほとんどである。

yekoroka/ekoroku「黒」: (KT), ekurok/ekorokpiy (KD), ekuroko (KK)

yevampiy/ivanini「6」: (KD), ivan (KK), iwampe (KT)

yeksisam(<ihoku sisam)「商人」: (KD), yoku sisam (KT)

- b) 音節末では重母音の第二母音となる。

toy「土」haw「声」cf. yay-「?」wen「悪い」

4) 音節構造

- a) 日本語と同様非常に単純である。語頭には子音の連続はなく, 拗音のような子音と半母音の連続もない。(即ち C_1C_2- , $C_1yV(-)/C_1wV(-)$ は存在しない。)
b) 同じ母音が連続した可能性がある。(即ち母音の長短の区別がある可能性あり)。
c) 日本語と異なり, 閉音節も開音節と同様一般的である。
d) 音節末に現れ得る子音は以下のとおりである: /p, t, k, s, r, m, n, w, y, /
e) 音節末に現れない子音は以下のとおりである: /c, h, ʔ/
f) 母音で始まる音節は母音の前に声門閉鎖音 /ʔ/ があると見なすので,
 C_1V または C_1VC_2 の音節となる。

5) アクセント

アクセントに関しては不明の部分が多く確実に言えることは少ないが, 以下のことが推測可能であると考えられる。

- a) 資料が断片的かつ非常に語数に制約があり, その信憑性は必ずしも高いとは言えないが, ピッチアクセントであると考えられると共に母音の長短も弁別的である可能性もある。
b) ピッチアクセントであるとするならば, 北海道方言と同じように低から高への上昇が弁別的である。この上昇点より前の音節はすべて低く, その後ろの音節は次第に下降したと考えられる。
c) アクセント核の位置は, 方言差もあったであろうが, 現時点では北海道方言と

同じような傾向があったと見られる。

- d) 母音の長短も弁別的であったとするならば、ピッチアクセントとは全く無関係に存在した可能性もある。これはアクセントの高いところが母音が長いという対応関係を文献は必ずしも示していないことによる。

	KK	KD	KT	RA*
「風」	reera	rer	rera	reera
「霧/雲」	uurar	urar	urarube	uurara
「脂肪」	---	ke	chepke (<cep+ke)	kee
「道」	ru	ru	toiru (<toy+ru)	ruu
「2」	tuup	tubic	doobechi/tubechi	tuh

*: 樺太ライチシカ方言

2. アイヌ語の母音の長短とピッチアクセントに関する先行研究とその問題点

a. 服部四郎 (1967), 服部&知里 (1960)

アイヌ祖語には音韻上の弁別的特徴として母音の長短のみを挙げ、ピッチアクセントは音韻的には非弁別的であるとした。即ち、樺太アイヌ語の音声・音韻的特徴が本来のアイヌ祖語の姿であるとしたのである。

北海道アイヌ語では一般に長母音の音節がピッチが高くなり、母音の長短は非弁別的となり、代わりに音節のピッチが音韻上の弁別的特徴となったとしている。

樺太アイヌ語では母音の長短を音韻上の弁別的特徴として継承し、ピッチアクセントは本来の音声上の弁別的特徴として継承したとしている (1)。

一般にアイヌ語においては母音の長い音節はピッチが高い傾向がある。即ち、これは北海道方言では母音の長い音節はそのピッチが高いし、樺太方言でも長母音をもつ音節はほとんどの場合ピッチも高いという傾向がある。しかし、下記の本論で見るように、開音節の単音節語 CV において北海道方言と樺太方言の両方言で母音が短い語が数少ないが見られ、また閉音節の単音節語 CVC においては北海道方言と樺太方言の両方言でその母音が常に短くそれらの語が数多く見られる。そのような語の母音の長短やピッチアクセントについては全く言及しておらず、アイヌ祖語のピッチアクセントを復元する際の大きな問題となる。

服部らの説ではアイヌ祖語においては母音の長短のみが音韻的に弁別的でありピッチアクセントは音韻的に非弁別的であるとしている点も問題であり、逆にこれはピッチアクセントが本来の特徴であったとする可能性 (cf. 村山: 1993: 22) やピッチアクセントと母音の長短とは全く音韻レベルで独立したものという可能性も否定できないにも関わらず全くそのことには言及していないし、その可能性を追求さえもしなかった。

b. A. Vovin (1993)

Vovin は服部らの説を覆し、アイヌ祖語には音韻上の弁別的特徴として母音の長短とピッチアクセントの両方が独立して存在していたとしている。その理由として樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントとの間に1対1の関係がかならずしもあるわけではなく、単音節で開音節の語にのみ1対1の関係があること

がほとんどであり、その他の場合には1対1の対応はないという事実を挙げた。さらに母音が長い場合でもピッチが低い語例がだいたいあり、例外と考えることはできないとしている。しかしながら、その説を支持する理由や要因が千島方言などの不十分なデータや憶測に基づいていることが多いため信憑性に欠ける部分も多い。特に服部(1967)のアイヌ語方言辞典の不十分な分析による欠落した分類化が分類化そのものの信憑性を決定的に欠いている。またこの二つの弁別性があることがなぜ服部らの説、即ち、母音の長短の弁別性のみによるものより妥当性があるのかはあまり示されていない。本来このような弁別の種類の多寡が問題となる場合、一般にはその言語内においてより一貫性と体系性があるほうがより良い選択となると考えるが、その点に関しての言及も全くない。

さらに上記の両先行研究(a), (b)ではどちらもピッチアクセントや母音の長短の変化を言語内の変化として捉えているが、史的隣接言語との言語接触による変化の可能性もあると考えられるが、この点に関してはどちらの先行研究も全く言及していない。

3. 北海道アイヌ語と樺太アイヌ語の音韻体系の相違

この節では北海道アイヌ語と樺太アイヌ語の史的関係を見るために詳しく音韻体系の比較をする必要があるので、母音、子音、半母音、促音などの音韻構造とアクセントなどの超音節構造の対応関係を見ていく。

a. 母音と子音の対応

1) 母音の対応についてはほとんどの場合同じ母音が対応する。

北海道アイヌ語における音節末の子音 /r/ は弾き音で、その直前の母音が響きあたかもそこに母音があるかのように聞こえるが、音韻的に /r/ の直後に母音があるかないかははっきり区別される。閉音節である。

etor「鼻汁」: etoro「いびきをかく」、retar「白い」: re-tara「3俵」

樺太アイヌ語ではその子音の直後には同じ母音を実際に挿入され、音韻的区別がない。従って、開音節となる。但し、中には + rV の形式をとらず、/h/ で交換することもある。

北海道 (-) CVr (-)	樺太 (-) CVrV (-)	「意味」
kor	koro	「持つ」
pir	piri	「傷」
kisar	kisara/kisaru	「耳」
mosir	mosiri	「世界、国」
surku	suruku	「毒」
ʔarka	ʔaraka	「痛い」
ʔutar	ʔutara, ʔutah	「人々」

2) 音節末に立つ閉鎖音 /p, t, k/ と摩擦音 /h, s/

北海道アイヌ語で音節末に立つ閉鎖音 /p, t, k/ は樺太アイヌ語では音節末には立たず、摩擦音 /h/ が立つ。また北海道アイヌ語で母音が /u/ の場合は樺太アイヌ語では /ɥ/ となる場合がある。

北海道	樺太	「意味」	北海道	樺太	「意味」
cep	ceh	「魚」	cup	cuf	「月」
mat	mah	「女」	kut	kuh	「帯」
?itak	?itah	「言葉」	yuk	yuf	「鹿」

北海道アイヌ語で母音 /i/ がこれらの閉鎖音の直前にある場合、樺太アイヌ語では /s/ が対応する。

北海道	樺太	「意味」
cip	cis	「舟」
rit 「腱」	ris	「筋」
sik	sis, (sih)	「目」

3) 閉鎖音 /p, t, k/ の促音

北海道アイヌ語の閉鎖音 /p, t, k/ の促音に対し、樺太アイヌ語では軟口蓋摩擦音 /h/ が対応し、促音はない。

	樺太	「意味」
ceppo	cehpo	「小魚」
satte	sahte	「乾かす」
wakka	wahka	「水」

b. 音節とアクセントの対応

1) 基本的には北海道アイヌ語の多くの方言における弁別的ピッチアクセントと樺太アイヌ語の非弁別的ピッチアクセントとはほぼ一致する。

北海道	樺太	「意味」	北海道	樺太	「意味」
poro LH	poro LH	「大きい」	kor H	koro LH	「持つ」
seta LH	seta LH	「犬」	?ape LH	?ape LH	「火」

北海道	樺太	「意味」	北海道	樺太	「意味」
kamuy LH	kamuy LH	「神」	?inaw LH	?inaw LH	「御幣」
hema(n)ta LHL	hemata LHL	「何」	?emina LHL	?emiina LHL	「笑う」
hum H	hum H	「音」	mat H	mah H	「妻」

2) さらに上記に示したように、北海道アイヌ語における単音節で開音節の語はピッチが高いだけでなく一般に長く発音されることが報告されている(服部：1964；浅井：1969；Refsing:1986；田村：1988 など)。このことはとりもなおさずピッチと母音の長さには何らかの音声学上の関係があることを示唆している。この関係は北海道方言において2音節以上の語であっても、開音節でアクセントのある音節は一般に長くなることを示唆し、実際にその音節はピッチが高く母音が長い。それに対応する樺太アイヌ語の語における母音は長い。

以下の樺太方言語彙のピッチアクセントに「？」を付けたものがあるが、これは樺太方言ではピッチアクセントが音韻上非弁別的であり、現れないので確定できなかったものである。一般に北海道方言ではピッチが高い開音節は長いので、それがどの程度樺太方言に適用できるかは問題であるが、ここでは一応それを基盤にして、さらに樺太方言のピッチアクセントの一般的規則(村崎1979:5-6)を基にピッチア

クセントを推定した。

北海道		樺太		「意味」	北海道		樺太		「意味」
ka	H	kaa	H	「糸」	ni	H	nii	H	「木」
ʔane	HL	ʔaane	HL	「細い」	hese	HL	heese	HL	「息をする」
hacir	HL	haaciri	HLH	「転ぶ」	hure	HL	huure	HL	「赤い」
kera	HL	keera	HL	「味」	nirus	HL	niirus	HL?	「歯茎」
pokor	HL	pookoro	HLH	「生む」	tokes	HL	tookes	HL?	「午後」
tunas	HL	tuunas	HL	「早い」	yenu	HL	yeenu	HL?	「膿が出る」

北海道		樺太		「意味」
(ʔe)mina	(L)HL	(ʔe)miina	(L)HL	「笑う」
(ʔi)kasiw	(L)HL	(ʔi)kaasiw	(L)HL	「手伝う」
(ko)rura	(L)HL	koruura	LHL?	「届ける」

北海道		樺太		「意味」
(cip H「舟」)		cipoo LH		「舟をこぐ」
		<cip「舟」+oo「こぐ」		
kayo LH		kayoo LH		「大声で呼ぶ」
ʔiku LH「酒を飲む」		ʔikuu LH「喫煙する」		
		<ʔi「それ」+kuu「のむ」		

これに反して北海道方言でピッチが低い音節が樺太方言では長母音に対応しているケースがいくつか見られる。

北海道		樺太		「意味」
nina	LH	niina	HL	「すりつぶす」
kama	LH	kaamanpa	HL	「またぐ」
kiki	LH	kiiki	HL	「掻く」
sini	LH	siine	HL	「休む」
kasiw/kasuy	LH	kaasiw	HL	「手伝う」
nociw	LH	noociw	HL	「星」
karip	LH	kaaris	HL	「輪」
nisew LH「どんぐり」		niisew	HL	「柏の実」

さらに樺太方言では開音節で単音節中の母音はすべて長くピッチアクセントもすべて高い(2)。

4. 本論

これまで述べてきたデータを十分に活用し、長母音の音節と低いアクセントをとる音節の体系的説明がなされなければならない。そのための前提としては長母音と高いアクセントが1対1の関係があるということであるが、これは実際には必ずしもそのような関係にはない。下記のまとめに見られるように様々な音節をもつ語はある特定の対応関係をもつ

が、服部（1967）が示したような母音の長短のみを音韻的弁別性をもつものとするのではその対応関係を十分捉えることができない。即ち、その点においては Vovin(1993)と同見解をとり、母音の長短だけでなくピッチアクセントも音韻的弁別上の特徴と見なさなければ、その関係は正しく認識できないと考える。従ってここでは従来なされてこなかった服部のアイヌ語方言辞典の語彙における、詳細にわたる母音の長短とピッチアクセントの対応関係を位置付けることが出発点であり拙論の目的となる。

音節構造における樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントの対応をまとめると次のようになる（語例はすべて服部のアイヌ語方言辞典(1964)からの引用）：

(1) 開音節のみからなる語彙

(1.1) 北海道アイヌ語の第一音節のピッチアクセントが低い場合：

- a) 対応する樺太アイヌ語の第一音節はピッチアクセントが低いが、偶数の音節（特に第2音節）が高く、モーラ数はそのままである。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV CV LH	poro, kuta	CV CV LH	poro, kuta
CV CV CV LHL	hemata, heroki	CV CV CV LHL	hemata, heroki
CV CV CV CV LHLH	hosipire, ʔutasare	CV CV CV CV LHLH	hosipire, ʔitasare

- b) 対応する樺太アイヌ語の第二音節はピッチアクセントが高く2モーラである。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV CV LH	cipo	CV CVV LH	cipoo
CV CV CV LHL	ʔetoro, ʔesina	CV CVV CV LHL	ʔetooro, ʔesiina
CV CV CV CV LHLH	ʔusaraye	CV CVV CV CV LHLH	ʔusaaraye

- c) 対応する樺太アイヌ語の第一音節は反対にピッチアクセントが高く2モーラ（2音節）になる。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV CV LH	kiki, sini, kani	CVV CV HL	kiiki, siine, kaani

(1.2) 北海道アイヌ語の第一音節のピッチが高い場合：

- a) 樺太アイヌ語の第一モーラのピッチアクセントも高く2モーラになる。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV H	ka, mi, ru, to	CVV H	kaa, mii, ruu, too
CV CV HL	hese, rera, tope	CVV CV HL	heese, reera, toope

(2) 閉音節を含む音節からなる語彙

(2.1) 北海道アイヌ語の多音節の語の中に一つまたは一つ以上の閉音節がある場合：

- a) 北海道アイヌ語において高いピッチをもつ CVC* の C* が /p, t, k, s, m, n, w, y, / の場合、それに対応する樺太アイヌ語の語は C** を含む音節は常に閉音節で短くピッチは高いと考えられる。が、閉音節を末音節にする CV|CVC の語には(1.1) (c)の CV|CV と同様に開音節の母音が長く、ピッチアクセントは高いと考えられる。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CVC* H	kap;kem;sey	CVC** H	kah;kem;sey

CVC* CV	HL	wakka;riwka;nuyke	CVC** CV	HL	wahka;riwka;nuyke
CVC* CV CV	HLH	yantone (他例なし)	CVC** CV CV	HLH?	yantone
CV CVC*	LH	ʔekas;ʔinaw;kamuy	CV CVC**	LH	ʔekas;ʔinaw;kamuy
CV CVC*	LH	kasiw, nociw, karip	CVV CVC**	HL	kaasiw, noociw, kaaris
CV CVC* CV	LHL	ʔikasma, saranpe	CV CVC** CV	LHL	ʔikasma, saranpe
C*:/p, t, k, s, m, n, w, y, /			C**:/s, m, n, w, y, h/		

- b) 北海道アイヌ語において高いピッチをもつ CVC* を含む語で C* が /t/ の場合、それに対応する樺太アイヌ語の語は C* を含む音節はその直後に母音をとって閉音節となり、常にその母音は短くピッチは低いと考えられる。ただし北海道アイヌ語の単音節 CVC のみの語の場合は、それに対応する樺太アイヌ語の CVC*V ではアクセントの規則に従って第2音節目にピッチが移る。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CVC*	H kor, rar, tur	CV C*V	LH koro, raru, turu
CVC* CV	HL pirka, kirpo	CV C*V CV	HLH? pirika, kirupu
CV CVC*	LH sirar, mosir, mokor	CV CV C*V	LHL? sirara, mosiri, mokoro
CV CVC* CV	LHL ʔepirka, ʔunarpe	CV CV C*V CV	LHLH? ʔepirika, ʔunarape
C*:/t/		C*:/t/	

- c) 北海道アイヌ語において低いピッチをもつ CVC* を含む語で C* が /p, t, k, s, m, n, w, y, / の場合、それに対応する樺太アイヌ語の語は C** を含む音節は常に閉音節で母音は短くピッチは低いと考えられる。また北海道アイヌ語において低いピッチをもつ CVC* を含む語で C* が /t/ の場合、それに対応する樺太アイヌ語の語は第一音節は母音が長くピッチは高くなり、C* を含む音節はその直後に母音をとって閉音節となり常にその母音は短くピッチは高いと考えられる。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV CVC*	HL sisam;kukew;ʔusey	CVV CVC**	HL siisam;kuukew;ʔuusey
CV CV CVC*	LHL ʔonuman, kemorit	CV CVV CVC**	LHL ʔonuuman, kemooris
CV CV CVC*	LHL ʔetukem, ʔetaras	CV CV CVC**	LHL? ʔetukem, ʔetaras
C*:/p, t, k, s, m, n, w, y, /		C**:/s, m, n, w, y, h/	
CV CVC*	HL yukar, urar, hacir	CVV CV C*V	HLH yuukara, uurara, haaciri
C*:/t/		C*:/t/	

- d) 北海道アイヌ語が二つの閉音節が隣接する（第一閉音節のピッチは常に高い）場合、それに対応する樺太アイヌ語の語は常に第一音節の母音が短くピッチは高いと考えられる。

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CVC* CVC	HL koysum, notkew	CVC** CVC	HL? koysum, notkew
C*:/p, t, k, s, m, n, w, y, /		C**:/s, m, n, w, y, h/	
CVC* CVC	HL sirpok, sirwen	CV C*V CVC	HLH? siripoh, siriwen
CVC CVC*	HL yonkor, ʔupsor	CVC CV C*V	HLH? yonkoro, ʔuhsoro
CVC CVC* CV	HLH senpirke (他例なし)	CVC CV C*V CV	HLHL? senpirike
C*:/t/		C*:/t/	

(3) 例外と考えられるもの

(3.1) 他の形態素などが付加されたもの

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV H	ri, ka	CV(CV) L(H)?	riye, kasi
CV H	so	(CV) CV (L)H?	ʔeso
CVC H	mos	(CVV) CVC (H)L?	toomus
CV CV LH	ciye	CVV CV(CV) HL(H)?	ciyehe
CV CV HL	raha	(CV) CV CV (L)HL?	ʔuraka

(3.2) 形態素が付加されないもの

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV CV CV HLH	sineto	CV CV CVV HLH?	sinetoo
CVC CV HL	pinne	CVV CVC HL?	piineh
CVC CV HL	niste, matne	CVC CVC HL?	nisteh, matneh
CVC CV HL	tanpa	CVC CVV LH?	tanpaa
CV CVC CV LHL	poronno	CV CVV CV LHL?	poroono

まず、北海道方言においてC Vの単開音節はピッチが高く、それに対応する樺太方言における長母音をもつ開音節も高いが、ピッチが高いC Vのみの単開音節語は北海道方言では短母音の他の何らかの形態素が付加された場合(例えば、名詞の概念形から所属形へ変化させるとき: 下記参照)にはそのC Vの音節がピッチが低くなるものが数多くあり、この点から考えるとC Vの単開音節でもアイヌ祖語にも本来はピッチアクセントにはHとLがあったと考えられる。この規則はC V Cの単閉音節語についても適用される。単音節の語彙では閉音節C V Cに関してのみ Vovin(1993:68-69)にも同様の言及が見える。以下に服部(1967)からいくつか語例を挙げる:

北海道アイヌ語	語例	樺太アイヌ語	語例
CV H	ku「弓」	CVV H	kuu「弓」
CV CV LH	kuwe(八, 沙), kuye(帯)	CVV H?	kuu「弓」
CV H	ra「肝」	(CV) CV(CV) LHL?	uraka「肝」
CV CV HL	raha「の肝」(八, 帯, 宗)	(CV) CV(CV) LHL?	uraka「肝」
CVC H	hon「腹」	CV CV CV HLH?	honihi「腹」
CVC CV LH	honi「の腹」	CV CV CV HLH?	honihi「腹」
CVC H	soy「外」	CVC H	soy「外」
CVC CV HL	soyta「外に」	CVC CV HL?	soyta「外に」

樺太アイヌ語における長母音をもつ2モーラの語はアイヌ祖語においても長母音であつたろうと考えられる(cf. 山本氏の方言語彙(3))ことから、アイヌ祖語においては本来単音節で開音節の語C Vのピッチアクセント(例外として挙げた形態素が付加された語例では樺太アイヌ語でも短母音)と長母音/開音節で2モーラの語C V Vのそれとは異なっていたと推測できる。

開音節のみの二音節以上の語は北海道方言では第二音節が高く、それに対応する樺太方言では第二音節が長くなるものと短いものとがあり、さらに第一音節が長くなるものがあ

ること、また北海道方言の二音節以上の語でも第一音節が高く、それに対応する樺太方言では第一音節が長くなる。即ち、北海道方言内で同じ音節形式（例、CVCV, CVCVC など）をとってもピッチアクセントが異なることが非常に多く、二音節以上の語では特にその傾向が強い。また北海道方言において音節、ピッチアクセント、母音の長短の音的パターンが同じ語（e.g. $\overline{\text{CVCV}}$; $\overline{\text{CVCVC}}$ をもつ語）であってもそれに対応する樺太方言ではその音的パターンが異なること（e.g. $\overline{\text{CVVCV}}$, $\overline{\text{CVCV}}$, $\overline{\text{CVCVV}}$; $\overline{\text{CVCVC}}$, $\overline{\text{CVVCVC}}$ など）が多く見られることから、アイヌ祖語には母音の長短のみが音韻上弁別的であった訳ではなくピッチアクセントも弁別的であったことが窺える（より詳細な議論は拙論（2）に掲載）。

次に北海道方言における閉音節を有する二音節以上の語について述べる。この閉音節を有する語において、その語中の閉音節のピッチが高い場合（2.1. C）も存在するが、多くの場合その閉音節が高く（しかし、常に短い）、これに対して樺太方言ではそれに対応する /s, m, n, w, y, h/ を音節末尾音とする閉音節の母音は常に短い。また北海道方言では閉音節の母音のピッチアクセントが高い場合は常に長く発音されるという音声学的特徴があり、樺太方言においても一般に長母音をもつ閉音節はピッチが高いと考えられる（その証拠に樺太方言においても閉音節の母音は常に短）ので、その閉音節直前の開音節のピッチが高い場合（2.1. C の例2;3）、その開音節の直前に母音が付加される場合と付加されない場合があり、その付加する要因と考えられる決め手になるものはない。従って、このような母音の長短とピッチアクセントを全く別々に考えなければならない。

これらを総合して考えると、樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語のピッチアクセントの対応関係は「母音の長短もピッチアクセントも主従関係がなく同等に独立した音韻の特徴を持つアイヌ祖語からそれぞれの方言に発達した」という考え方以外はありえない。これは基本的には Vovin の説を支持することになるが、その内容は異なるものと考えられる。

5. 結論

以上のことから例外はいくつかあるものの詳細に見ると、北海道アイヌ語のピッチアクセントと樺太アイヌ語の母音の長短の対応関係は、服部の示したような母音の長短のみが音韻上の対応関係ではなく非常にその対応関係が複雑であることがわかった。アイヌ祖語を暫定的に立てるにしても、母音の長短とピッチアクセントの双方が音韻上の特徴として必須であることを述べた。この二つの特徴は Vovin (1993) が述べたものと基本的には一致するものの、詳細においてはだいぶ異なると考えられる。

次の重要な課題としてはどのようにして通時的にこれらの変遷を理論的かつ体系的に説明し得るか、また本来のアイヌ祖語はどのような音韻上の性格をもっていたのかを示すことである。

注

(1) : 服部(1967: 207-8)はアイヌ祖語を以下のように復元した :

樺太アイヌ語		アイヌ祖語		北海道アイヌ語
CVh/Cis	<	* CVp/t/k	>	CVp/t/k
CV rV/(CVh)	<	* CVr	>	CVr
CV CV	<	* CV CV	>	CV CV
CV CV CV	<	* CV CV CV	>	CV CV CV
CV CVV CV	<	* CV CVV CV	>	CV CV CV
CV CVC	<	* CV CVC	>	CV CVC
CV CVS	<	* CV CVS	>	CV CVS
CVC CV(CV)	<	* CVC CV(CV)	>	CVC CV(CV)
CVS CV(CV)	<	* CVS CV(CV)	>	CVS CV(CV)
CVV CV	<	* CV V CV	>	CV CV
CVV CVC	<	* CV V CVC	>	CV CVC
CVV CV	<	* CV V CVV	>	CV CV
CVV CVS	<	* CV V CVS	>	CV CVS

S:/w, y/

(2) : これに対して北海道の山本多助氏(1904年釧路市春採生まれ)の釧路方言ではピッチアクセントは音韻的に非弁別的であるが、母音の長短による音韻上の区別があると本人自身が記している[山本多助「アイヌ・モシリ」, 第8号1959年(復版 1998年) pp. 199-216に報告書]。これに関してはこれまで服部&知里(1960: 35-36)では語例を6例しか挙げずに説明しているが、実際にはこの語例はその約3倍の17例**挙げられている。またこの方言は服部らによって一時は真剣に取り上げられ、その重要性が指摘されたが、その後の論文(服部: 1967)では全く取り上げられていない。このような認識変化に同調するかのように、田村すず子氏(personal communication 2000年8月30日)は山本氏の生前、直接本人に会って調査したところ、山本氏の方言(個人語)には母音の長短の区別はなかったと証言している。

もし事実山本氏の記述の大部分が虚偽であるとしても、以下のようにさまざまな史的關係を模索するきっかけとなる。その意味における重要性は指摘できる。

即ち :

- (あ) アイヌ祖語の開音節単音節語には長母音と短母音の音韻上の区別を有していた蓋然性がある。
- (い) ピッチアクセントも音韻的特徴として存在した蓋然性がある。
- (う) 北海道方言において(山本多助氏の方言を除く)はアイヌ祖語の開音節単音節語の長母音と短母音の区別が消失し、その代わりにその音韻上の弁別としてピッチアクセントが前景化した。単音節語の母音の長短の区別はピッチアクセントでは弁別されなかった(即ち、単音節語の母音はすべて短くなった)と考えられる。

(え) 樺太方言においてはアイヌ祖語の開音節 / 単音節中の母音の長短の弁別がほとんど消失し、ほとんど長母音に移行したとも考え得る。

(お) アイヌ祖語の開音節単音節語には長母音と短母音の音韻上の区別を有していたという事実は二音節以上の音節をもつ語において少なくとも第一開音節の母音には長母音と短母音の2種が存在したという推定の裏付けになるとも考えられる。

(3) : 以下の語例 (山本氏自身の記述)

山本氏の方言における長母音の語例

とそれに対応する単音節の語例 :

1. ʔa 「座る」
ʔaa 「自分, 私」
- @ 2. ka 「表面, 上」
kaa 「糸」
- @ 3. ki 「行う, 行動, する」 ki 「だに, 虱, 蚤」
kii 「よし, あし, すすき」
4. ku 「弓」 ku- 「私, 自分」
kuu 「飲む」
- @ 5. ma 「焼く」
maa 「泳ぐ」
6. me 「(女陰部の) 核」
mee 「寒い, 冷たい, 涼しい」
7. nu 「高温泉, 光熱泉」
nuu 「聞く, 聞こえた」
8. ʔo 「尻, 末, 下」
ʔoo 「乗る」
- @ 9. pa 「頭」 pa 「年」 (pa 「煙」; pa 「煙, 湯気」 [名])
paa 「見つける」
10. pe 「汁, 液, 池/沼の水」 (pe 「しずく」)
pee 「者, 物」 (-pe 「者, 物」)
11. pi 「(結び目) を解く, しゅっ/ぴっと引く」
pii 「しずく, (強く) つらなる」
12. pu 「倉庫, 蔵」
puu 「起る, 隆起, 盛り上がる, 膨れ上がる」
- @ 13. ri 「剥ぐ, むく」
rii 「高い, 高所」
14. ru 「道路, 通路」
ruu 「(氷) がとける」
15. ta 「採取」
taa 「これ, それ」

樺太アイヌ語における長母音の語例

とそれに対応する単音節の語例 :

- ʔaa 「座る」

- kaske/kasiike/kaa 「上」
kaa 「糸」
- kii 「行う, する」
ki 「よし, あし」
- kuu 「弓」 ku- 「私 (1p. s. g.)」
kuu 「飲む」
- maa 「焼く」
maa 「泳ぐ」
-
- mee 「寒い」
-
- nuu 「聞く」
-
- ʔoo 「乗る」
- .sapa 「頭」 paa 「年」 (paa 「煙」)
paa 「見つける」
-
- ʔorunpe 「物」 -pe 「者, 物」
-
- puu 「高倉」

- .riye 「剥ぐ, むく」
ʔorii 「(山, 雲が) 高い」
- ruu 「道路」
ruu 「(氷) がとける」
-
- taa 「あの」

- @16. to 「沼, 湖水」 (to 「乳房」) too 「沼/湖」 (too 「乳房」)
 too 「今日, (晴れた)日, (する)日」 too 「日」
 17. ya(y) 「私, 自分」 (ya 「網」 ya 「陸」) --- (yaʔunsiri 「陸」 yaata 「陸に」)
 yaa 「網」 yaa 「網」
 〔() 内は他の北海道方言〕
 @ : 服部&知里 (1960:36) で示された語例

参考文献

- 浅井亨 1969 アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略— アイヌ民族誌(下) アイヌ文化保存対策協議会編 第一法規
- Dybowski, Benedykt 1892 Słownik narzecza Ainow, zamieszkujących wyspę Ssumszu w luncach Kurylsim przy Kamczatce. Ignacy Raslinski (ed.) Rozprawy Akademii Umiejetnosck, Wydział Filologiczny, Serya II. Tom I, Krakow
- 服部四郎 1957 「アイヌ語における年長者層特殊語」民族学研究 第21巻 第3号 pp. 38-45 (158-165)
- 服部四郎&知里真志保 1960 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」民族学研究 第24巻 第4号 pp. 31-66 (307-342)
- 服部四郎 1961 「アクセント素, 音節構造, 喉音音素」音声の研究 第9巻 日本音声学学会 pp. 6-23
- 服部四郎 1964 アイヌ語方言辞典 岩波書店
- 服部四郎 1967 「アイヌ語の音韻構造とアクセント」音声の研究 第13巻 日本音声学学会 pp. 207-223
- 金田一春彦 1966 「高さアクセントはアクセントにあらず」言語研究 第48号
- 金田一京助 1933 言語研究 河出書房
- 金田一京助 1973 アイヌ語研究 金田一京助選集 I 三省堂
- Kraproth, Julius 1823 Asia Polyglotta, Paris
- Krashennnikov, M. 1755-6 Opisanie zemli Kamchatki, St. Petersburg
- Meillet, Antoine 1970 General Characteristics of the Germanic Languages, Miami Linguistics Series No.6 University of Miami Press
- 村崎恭子 1976 カラフトアイヌ語 国書刊行会
- 村崎恭子 1979 カラフトアイヌ語—文法編— 国書刊行会
- 村山七郎 1971 北千島アイヌ語 国書刊行会
- Refsing, Kirsten 1986 The Ainu Language Aarhus University Press
- 鳥居龍蔵 1903 千島アイヌ 吉川弘文館
- Vovin, Alexander 1993 A Reconstruction of Proto-Ainu, E.J.Brill
- Voznesenski, Il'ia 1840 (1843年以前) Kuril'skiie slova I proch

**“On the Historical Relationship of the Pitch Accent System of Hokkaido Ainu and the Vowel Length System of Sakhalin Ainu (1)”
— A Preliminary Study toward the Solution of the Historico-Phonological Relationship of Hokkaido Ainu and Sakhalin Ainu —**

This study is a preliminary research on the historical relationship of the pitch accent system of Hokkaido Ainu and the vowel length system of Sakhalin Ainu. There are two opposing theories on the phonological features of Proto-Ainu, Hattori Shiro's Vowel Length Theory (1967) and Vovin's Vowel Length and Pitch Accent Theory (1993): Hattori proposed that Proto-Ainu should have a phonological distinction between long and short vowels without pitch accent; on the other hand, Vovin proposed that Proto-Ainu had a phonological distinction not only between long and short vowels but also between high and low pitch accents. This paper suggests that Proto-Ainu had both vowel length and pitch accent as the phonological features, which supports Vovin's theory.